

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二  
電話(三五四二)五四七二番

清元協会

中央区銀座七の十五の四のB一  
電話(三五四二)四〇九七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館  
電話(三五七二)〇二一六番

新内協会

新宿区大久保一ノ三ノ二  
電話(三三〇〇)四六五三番

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四  
電話(三七二五)一五一八番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四  
電話(三五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三  
電話(三五八五)九九一六番  
(五十音順)

後援 東京都

平成三年三月一日(金) 国立劇場小劇場

第一部 正午開演 三時半終演  
第二部 午後四時開演 七時半終演

'91 都民芸術フェスティバル

# 第二十一回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'91 都民芸術フェスティバル参加公演(平成2年度東京都助成公演)一覧

分野	種目	団体名	演目	公演数	期日・会場	入場料金	問合せ先
音	オペラ	(財)日本演奏連盟	ロッシーニ 「ラ・チェネントラ」 (原語上演) (藤原歌劇団)	3	2/10・2/12・2/14 東京文化会館大ホール	15,000~ 1,500円	(財)日本オペラ振興会 電話 3224-9633
			ヴェルディ 「リゴレット」(原語上演) (二期会オペラ振興会)	3	2/22・2/23・2/24 東京文化会館大ホール	10,000~ 1,500円	(財)二期会オペラ振興会 電話 3370-6441
			三木 稔 「あだ」 (日本オペラ協会)	3	3/9・3/10 東京芸術劇場中ホール	8,000~1,500円	(財)日本オペラ振興会 電話 3224-9633
楽	オーケストラ 室内楽	(財)日本音楽家協会	第22回 都民のための コンサート	6	1/11~3/14 東京芸術劇場大ホール	3,000~1,000円	(財)日本演奏連盟 電話 3437-6837
			オーケストラ 室内楽	2	2/14・3/28 東京文化会館小ホール	3,000円	
	ポピュラー	(財)日本音楽家協会	「シャンソン ハイライト '91」	1	3/8 よみうりホール	2,500円	(財)日本音楽家協会 電話 3585-3903
	邦楽	邦楽連合会	第21回 邦楽演奏会	2	3/1 国立劇場小劇場	1,500円	邦楽連合会(義太夫協会) 電話 3541-5471
演	新劇	新劇団協議会	藤沢周平「橋ものがたり」 (合同公演)	12	1/13~1/22 東京芸術劇場中ホール	5,150円	新劇団協議会 電話 3341-8151 劇団文化座 電話3828-2216-7
			ふじた あさや 「青年の川」	10	1/16~1/29 九段会館池	定時制高校生貸切	新劇団協議会 電話 3341-8151
	児童劇	日本児童・青少年 演劇団協議会	「赤ずきんちゃんの 森の狼たちのクリスマス」 (舞台劇合同公演)	13	1/25~1/29 朝日生命ホール 1/31~2/3 東京都児童会館 2/5~2/6 前進座	当日売 2,500円 前売 2,200円 団体(20名以上) 1,600円	日本児童・青少年演劇団協議会 電話 3409-1797
舞	バレエ	(財)日本バレエ協会	「白鳥の湖」	3	2/27~3/1 東京文化会館大ホール	10,000~ 2,000円	(財)日本バレエ協会 電話 3462-5524
		東京バレエ協議会	スターダンサーズ・バレエ団 「ジゼル」(全幕)	2	3/26・3/27 東京文化会館大ホール	7,000~2,000円	東京バレエ協議会 電話 3725-8000 スターダンサーズ・バレエ団 電話 3401-2293
	現代舞踊	(財)現代舞踊協会	「幻森林」 「家族の晩餐」 「酔-酔うて候」	2	2/3・2/4 東京文化会館大ホール	4,000~2,000円	(財)現代舞踊協会 電話 3400-4544
	日本舞踊	(財)日本舞踊協会	第34回 日本舞踊協会公演	6	2/13・2/14・2/15 国立劇場大劇場	5,000円	(財)日本舞踊協会 電話 3533-6455
古典芸能	能	(財)能楽協会	都民能	1	1/19 国立能楽堂	2,500円	(財)能楽協会 電話 3574-6441
			式能	1	2/17 国立能楽堂	6,000円	
	民俗芸能	東京都民俗芸能 大会実行委員会	第22回 東京都民俗芸能大会	2	3/2・3/3 東京芸術劇場中ホール	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会 電話 048-857-5036(宮尾)
	寄席芸能	都民寄席 実行委員会	第21回 都民寄席	10	2/8~3/23 東村山市・小笠原村他	無料招待	都民寄席実行委員会 電話 0423-81-5534(大石)

○これらの個々の公演の詳細に関するお問合せは各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問合せは東京都教育庁生涯学習部文化課(電話 3212-5111 内線 44-531、44-532)へお願いします。

'91 都民芸術フェスティバルに寄せて



東京都知事 鈴木 俊一

芸術性の高い公演内容で、最高の舞台芸術を提供しようという出演者の方々のなみなみならぬ意欲と、都民の皆様の熱い声援に支えられて、都民芸術フェスティバルは東京都の代表的文化行事としてすっかり定着しております。誠に喜ばしい限りです。

都民芸術フェスティバルのシーズンがやってまいりました。このフェスティバルは、へすぐれた芸術を、心ゆたかなくらしの中へVをキャッチフレーズとして、東京都が芸術文化団体の公演を助成することによって、都民の皆様に優れた舞台芸術を鑑賞していただくという目的ではじめた催しで、今回で第二十三回を迎えました。

私は、いま、ふれあいとうるおいを大切に「マイタウン東京」づくりに全力を注いでおります。とりわけ芸術文化の振興は、私たちに豊かな心とゆとりある生活を与えてくれるものとして、重要な施策と考えており、写真美術館、東京芸術劇場などを開館し、その振興に力を注いでいるところであります。この都民芸術フェスティバルを他の文化施策とともに、都民の要望と期待に十分応えられるよう、また国際的にも誇れる催しとして、今後とも一層充実発展させてまいりたいと考えております。

この催しに一人でも多くの皆様が参加され、優れた舞台芸術を心ゆくまで鑑賞していただきたいと存じます。おわりにこのフェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださっている邦楽連合会のみなさんの御活躍を心から願っております。

第一部 番 組 (正午開演)

一、三曲尾 上の松  
宮城道雄 箏手付

箏 宮城 喜代子  
唄 宮城 数江  
箏 砂崎 知子  
三 絃 矢崎 明子  
同 絃 牧瀬 裕理子  
尺 八 青木 鈴慕

二、義太夫 傾城 恋 飛脚  
——新口村の段——

孫右衛門 竹本 朝重  
梅川 竹本 綾一  
忠兵衛 竹本 越若  
捕り手 竹本 越若  
三味線 鶴澤 駒登久

三、河東節 熊野

浄瑠璃 山彦 節子  
同 山彦 綾子  
同 山彦 祥子  
同 山彦 貴子  
三味線 山彦 貞子  
同 山彦 さち子  
上調子 山彦 千子

四、清元 梅柳 中宵月 (十六夜)

浄瑠璃 清元 登志寿太夫  
同 清元 成美太夫  
同 清元 小成太夫  
同 清元 喜美太夫  
三味線 清元 梅吉  
同 清元 吉寿朗  
上調子 清元 静二郎

五、新内帰咲名残の命毛（尾上伊太八）

浄瑠璃 富士松 加賀 三味線 新内 勝次郎  
上調子 新内 勝次郎

六、常磐津 近頃河原の達引（お俊伝兵衛）

浄瑠璃 常磐津 文字太夫 三味線 常磐津 菊助  
同 常磐津 小文字太夫 同 常磐津 一寿郎  
同 常磐津 八重太夫 上調子 岸澤 巳之吉  
同 常磐津 光勢太夫

七、長唄紀州道成寺

唄 柏 庄太郎 三味線 杵 屋 六三郎  
同 和歌山 富司郎 同 杵 屋 長之助  
同 柏 庄一郎 同 杵 屋 六治七  
同 柏 庄六 同 杵 屋 六治郎  
囃子 同 同 同 同 同 同  
笛 鳳 声 晴 之  
小鼓 望 月 昌 一  
立鼓 堅 田 喜 四 郎  
大鼓 堅 田 喜 三 郎  
太鼓 梅 屋 右 近

第二郎番組 (午後四時開演)

一、三曲夫 中田博之作曲 恋

砧

唄 中田博之  
同 菊池博音  
同 梅津博之  
同 高野和之  
同 高野和之  
同 高野和之  
同 高野和之  
三 絃  
尺 八 藤井治童  
同 東松君博香  
同 久松君博香  
同 村田佳松  
同 高野和之  
同 高野和之  
同 高野和之

二、義太夫絵本

太功記

—尼ヶ崎の段—

光秀竹本素八  
さつき竹本駒龍  
操竹本土佐子  
久吉竹本駒之助  
十次郎竹本越孝  
初菊竹本土佐恵

三味線 鶴澤寛八

三、新内関取千両幟(千両幟)

浄瑠璃 鶴賀伊勢太夫

三味線 鶴賀若狭  
上調子 鶴賀伊勢一郎

四、一中節お夏笠物狂(お夏)

浄瑠璃 都部部部  
同 都部部部  
同 都部部部  
同 都部部部  
一いき  
一いそ  
一けい

三味線 都部部  
同 都部部  
同 都部部  
同 都部部  
一江  
一ゆき  
一さき

五、清元道行故郷の春雨（梅川）

浄瑠璃	清元	清美太夫
同	清元	幸寿太夫
同	清元	清栄太夫
三味線	清元	秀二郎
同	清元	寿三郎
上調子	清元	栄七郎

六、常磐津恩愛 贖 関 守（宗清）

浄瑠璃	常磐津	松尾太夫
同	常磐津	和佐太夫
同	常磐津	一佑太夫
三味線	常磐津	文字兵衛
同	常磐津	文字蔵
上調子	常磐津	絃寿郎

七、長唄其面影二人椀久（二人椀久）

唄	芳村	孝次郎
同	松永	鉄庄治
同	松永	鉄裕輝
同	松永	兵衛
同	松永	鉄次郎
三味線	松永	忠五郎
同	松永	和佐次郎
同	松永	鉄九郎
同	松永	鉄雅輝
同	松永	忠史朗

囃子

笛	鳳	晴雄
小鼓	望	佐太郎
小鼓	望	太喜雄
立鼓	望	太左衛門
大鼓	望	左武郎

歌詞と解説(演奏順)

解説 竹内道敬

第一部

三曲尾 上 の 松

歌詞のはじめは謡曲「高砂」からとったもので、播州加古川の尾上の松にちなんで、平和な御代が永遠に続くことを願ったもの。九州系の地唄三弦曲として、またその手事曲の代表として知られていたが、この曲を有名にしたのは、宮城道雄が箏の手を付けてから。大正八年に手を付け、翌九年に東京音楽学校(現東京芸術大学)における第二回作品発表会で演奏してからである。はじめの手事は、「樂三段」ともいわれ、雅楽の感じを出しており、あとの手事は「神樂拍子」ともいわれ、二段の手事とチラシからなり、「神樂地」が合わされる。祝儀曲としてよく演奏されるが、この邦楽演奏会のはじめにふさわしい曲といえよう。

義太夫 傾 城 恋 飛 脚—新口村の段—

安永二年(一七七三)大阪豊竹座初演。菅専助・若竹笛躬合作。同じ題材は先に近松門左衛門の「冥土の飛脚」、紀海音の「傾城三度笠」でも扱われているが、本曲はそれらを集大成したものである。これ以後もこの作をもとにして多くの書き替え作品が出来ている。

三百両の封印を切り、梅川の身受けをすませたが、忠兵衛は追われる身となる。やがて二人は忠兵衛の実家大和の国新口村へやってくる。そこから今日の演奏。親孫右衛門が通りかかり、思わず鼻緒を切ってしまう。それを見ていた梅川が、暇乞いをする場面。お互いにそれと知りながら、晴れて名乗りが出来ないという、涙ながらの別れになる。

よく知られた話の筋は、その後によく書き換え作品が生まれている。一中節をはじめとして常磐津、清元、新内などにあり、また歌舞伎でも「恋飛脚大和往来」の題で、欠かせない演目になっている。

なお、第二部の清元「梅川」と比べていただけると、面白いでしょう。

河東節 熊 野

嘉永二年(一八五七)成立。山田流箏曲から歌詞を借りたもので「宗盛花見の段」として語られた。原拠は能の「熊野」。遠江の池田の宿の熊野御前は、平宗盛の寵愛を受けていたが、老母が病氣という手紙を受け取って暇乞いを願い出る。しかし宗盛は今を逃すともう二度と見られないかも知れない清水の花見に、熊野がいないと面白くないので、許可しない。やむなく牛車に乗って清水へお供をした

熊野が、舞を舞っていると、急に村雨が降ってくる。そこで「春雨の…」の古歌をうたい、また「いかにせん…」と、東国で病に伏している老母の安否を心配する歌を詠む。これをきいた宗盛は感動して熊野の帰国を許すという筋。そのうちこの河東節は、宗盛と熊野の一行が清水へ着き、酒宴をはじめたところから。

なおこの話はよく知られていて、山田流箏曲、河東節のほか、一中節宇治派、長唄にも同名の曲がある。

清元梅柳中宵月(十六夜)

安政六年(一八五八)二月、江戸市村座初演。河竹黙阿弥作詞、清元徳兵衛(一説にお葉、あるいはいそ)作曲。十六夜清心を主題にした「小袖曾我薊色縫」(こそぞそが・あざみのいろぬい)の四立目で初演された。

鎌倉極楽寺の所化清心は、大磯の遊女十六夜に通いつめ、女犯の罪を犯したといふので追放になる。それを知った十六夜は廓を抜け出し、稲瀬川で清心に出逢う。そしてどこへでも連れて逃げてくれというが、清心は断り、修行のために京都へ行くという。十六夜がそれを聞いて身を投げようとすると、引き止めてみると清心の子を宿しているという。どうにもならなくなった二人は、ともに入水することになる。(このあと二人は別々に助かるのだが、ここでは関係ない)。

幕末の江戸の退廃気分にあふれた曲で、今でも人気が高いのは、やはり現在にも共通するところがあるからだろうか。

新内 帰咲名残命毛(尾上伊太八)

延享三年(一七四六)十二月十三日、一つの心中未遂事件が起きた。男は津軽藩岩松家の家臣で、江戸詰枯筆役の原田伊太夫、二十七歳。女は江戸町一丁目太左衛門店太四郎抱えの遊女尾上、二十三歳。伊太夫は春ごろから馴染みを重ね、奉公もおろそかになり、親からは勘当を受け、無宿の浪人となった。結局二人は心中をはかるのだが失敗したというもの。この事件にヒントを得て、鶴賀若狭掾が新内に作詞・作曲したものが、その年月はよくわからない。およそ明和(一七六四〜七一)のころと推定される。

伊太八は堺屋の尾上と馴染んでもう二年。親からは勘当を受け、金に困っている。一方、尾上も幼ない時に両親に別れ、七歳から吉原で育った身の上である。その尾上に身受け話があつて、明日にでも引かされそうなのだが、伊太八はどうすることも出来ない。金の工面をしてくと約束したのに、来てくれないので、尾上はじれている。やっと来てくれたが、伊太八も病気がちで、出るのは愚痴ばかり。話し合った末に、男が肌脱ぎしてみせると、下は白無垢で死に装束。尾上も簞笥を明けて、やはり覚悟の死に装束に着替えるのであった。今日は時間の都合で、下にあたる尾上の部屋での場面を中心に演奏する。「蘭蝶」「明鳥」とともに新内節「端もの」の代表曲として知られている。

常磐津 近頃河原の達引(お俊)

別称「堀川」「お俊」。原作は同名の義太夫節。嘉永(一八四八〜五三)ごろ二世佐々木市蔵が作曲。原作は天明二年(一七八二)春、江戸外記座で初演された。歌祭文、歌舞伎、一中節などで当時知られていた京都のお俊伝兵衛の心中事件(河原の心中、または米屋の心中)に、京四条河原の喧嘩、表彰された親孝行な猿回しの話をからませたもの。とくに有名な中の巻「堀川猿回しの段」をほとんど



そのまま常磐津に作曲している。

井筒屋伝兵衛とお俊は相思相愛の仲であるが、横淵官左衛門がお俊に横恋慕して、二人を苦しめる。いろいろあって伝兵衛は横淵を斬ってしまう。お俊は貧しい堀川の生家に引き取られる。兄の猿回し与次郎と、盲目の母は、訪ねてきた伝兵衛に逢わせまいとするが、男に對するお俊の真心を知り、二人を心中に出し、猿を回してその門出を祝うという場面。貧しい庶民の生活の雰囲気の中に、人間愛を描いて美しい場面になっている。なかでも「そりやきこえませぬ伝兵衛様」以下のクドキは、とくに知られている。

### 長唄紀州道成寺

文久元年（一八六一）二月二十日、芝白金の末広御殿の床開きに初演された。五世杵屋三郎助（のちの十一世六左衛門）作曲。謡曲の歌詞をほとんどそのまま借りて曲を付けたもの。

長唄の道成寺ものとしては「京鹿子娘道成寺」（宝暦三年）をはじめとして、多くの作品があるが、古いものほど能から離れようとしている。そしてもともと新しいこの「紀州道成寺」が、能に一番近いというのは、面白い現象といえよう。幕末から明治初年にかけては、謡曲の歌詞そのままに長唄の手を付けるのが流行していて「枕慈童」「竹生島」「安宅勧進帳」「橋弁慶」「船弁慶」「望月」などがつくられている。

まず道成寺の縁起をとき、鐘の供養があるというので、それを拝むためにやってきた白拍子の道行。やがて女は寺に入り、烏帽子を借りて舞いはじめ。「仇し身の…」は謡曲にない部分。そのうち隙を見て鐘にとり付くと、鐘はたちまち落ちて、白拍子は鐘の中に隠れてしまう。そこでこの鐘にまつわる物語があり、やがて大勢の行者の法力によって落ちた鐘を引上げ、本性をあらわした蛇体を退散させるという筋。

## 第二部

### 三曲 夫恋砧

昭和四十四年の作曲。NHKから委嘱されて作曲・放送。同年度の芸術祭ラジオ部門音楽の部で、優秀賞を受賞した。

世阿弥作の謡曲「砧」を山田流箏曲にしたもの。九州芦屋の某は、訴訟のことがあって上京したが、すでに三年になった。故郷のことが気がかりなので、召使いの女夕霧を国へ帰し、今年暮には必ず帰ることずけた。夕霧は芦屋の里に着き、主人の妻に逢ったが、妻はただ夫を恋慕い、三年の留守の辛さを訴え、おりから聞える砧の音に誘われ、夕霧とともに砧を打ち、秋の夜に月を眺め、蘇武の故事や七夕の契りを思っ心を慰めていた。そこへ都からの便りがあり、この年の暮にも帰らぬと知り、さては夫は心変りしたかと落胆し、心乱れて病にかかり、ついに空しくなった。やがて夫は我が家に帰り、妻の死を悲しみ、梓弓にかけてその霊を呼び出してみると、恋慕の妄執のために墮地獄の苦しみを受けている事を訴え、夫の不実を恨んだが、やがて法華経の功德によって成仏した。

以上が謡曲「砧」のあらすじ。そのうちの前段の、砧を打つところから中入までを脚色した。謡曲ものの山田流箏曲の伝統をふまえ、序破急の構成をとり、器楽的な表現を避けている。もちろんその手事部には、砧を暗示する旋律はあらわれるが、謡曲のもつ文芸性の表現に重点がおかれている。なお、秋風、虫の音、嵐、涙などの表意的な器楽処理も、それほどくどくない。わかりやすい曲である。

義太夫 絵本 太功 記 — 尼ヶ崎の段 —

寛政十一年（一七九九）七月、大阪若太夫芝居初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作。明智光秀の、いわゆる三日天下を題材にしたもので、討ち死までの十三日間を十三段に描いている。そのうちの十段目は、俗に「太十」といわれるほどで、よく知られている場面である。

光秀の母さつきが尼ヶ崎に閑居しているところへ、光秀の妻操と、光秀の子十次郎の許婚初菊の二人がご機嫌うかがいにやって来る。とそこへ旅の僧侶が尋ねて来て、一夜の宿を頼む。これが実は身をやつした久吉（真柴秀吉）であった。そこへ十次郎が初陣の挨拶にやって来たが、さつきのすめで二人は婚礼となり、十次郎は死を覚悟しての出陣となる。最前から様子をうかがっていた光秀が、竹藪からあらわれ、久吉と見た僧を刺そうとするが、意外にも実の母を刺してしまう。そこへ重傷を負った十次郎が戦場から戻ってきて、敗戦のさまを語り、初菊と名残を惜しみつつ息絶える。さつきも息絶える。いよいよ敵に包囲され、光秀は駆け出そうとすると、久吉があらわれ、他日の決戦を約束して立ち去るまで。

ふつう「夕顔棚の段」と「尼ヶ崎の段」とに分けられるが、今日は「尼ヶ崎の段」の後半、重傷を負った十次郎が戦場から戻ってきたところからを、一部省略して演奏いたします。

新内 関取 千両 幟（千両幟）

義太夫節を新内に移したいわゆる「段もの」の一つ。原作は同名の「関取千両幟」で、明和四年（一七六七）八月大阪竹本座初演。全九場という長編で、彦根藩をめぐるお家騒動に、お抱え力士の稲川

と鉄ヶ嶽の争い、さらに御用達を勤める大阪商人鶴屋の息子やその許婚などもからむという複雑な筋。その二段目「稲川内の段」と「相撲場の段」を脚色したもの。

主人筋にあたる人のために、どうしても二百両の金が必要になった稲川は、金のため、今日の相撲の取組で鉄ヶ嶽に勝を譲る決心をかためる。それを知った女房は、稲川の髪を梳きながら、本心を打ち明けてくれぬことを嘆き、恨む。もつとも知られた「相撲取りを夫に持てば」以下は、原作の義太夫にもなかったところで、のちに義太夫に逆輸入されたほどである。

なおこのあとは、いよいよ取組になり、稲川が負けそうになる。と、二百両がこの勝負に賭けられる。それを知った稲川は鉄ヶ嶽を倒し、金を手に入れるが、それは女房が身を売った金で、やがて悲しい夫婦の別れになるというもの。時間の都合で、一部を省略して演奏される。

一中節 お夏 笠物 狂（お夏）

正徳五年（一七一五）十一月、江戸市村座の顔見世狂言「万歳女鉢木」（ばんぜい・おんなはちのき）の三番目に初演された。初世都太夫一中がはじめての江戸下りで、この曲で大当りをとった記念すべき浄瑠璃。ワキ都三中、三味線難波利山であった。ただし出版から見ると、その前に京都あたりで初演され、それを江戸に持ってきたものらしい。

直接の原拠は近松門左衛門作の「五十年忌歌念仏」。その下の巻「おなつ笠物狂」をほとんどそのまま。近松作品は宝永四年（一七〇七）大阪竹本座初演。初世都一中は近松と親交があったらしいので、

題材をそのまま借りたものと推定される。姫路の米問屋但馬屋の娘お夏の嫁入りの祝儀の日、お夏は手代の清十郎と逢っているところを見付かる。そして清十郎は、朋輩の勘十郎のためにお夏から借りていた七十両の金を発見され、袋叩きにあつて追い出されてしまう。その夜、ふたたび但馬屋へ忍び込んだ清十郎は、勘十郎の悪計みを知り、これを殺そうとして間違えて源十郎を殺してしまふ。清十郎は逃げ出し、お夏は狂乱してそのあとを追う。一中節はここからで、清十郎の妹お俊と許嫁のお三が、歌比丘尼の姿になり、清十郎を探す旅に出て、お夏に出逢うところ。はじめに当時はやり歌。「観ずれば……」で二人の歌比丘尼が登場。問答あつて「向かい通るは……」をきかせ、「ものに狂うが……」でお夏が登場する。お夏の心理描写があつて、三人のからみ。あとお夏の狂乱のさまを述べて終わるまで。

### 清元道行故郷の春春(梅川)

通称「梅川」。文政七年(一八二四)三月、江戸市村座で「冥土の飛脚」の道行として初演された。三升屋二三治作詞、初世清元齋兵衛作曲。第一部で演奏された「新口村の段」を改作した富本「道行恋飛脚」を、さらに清元へ移したもの。

故郷の新口村へ着いた梅川と忠兵衛が、孫右衛門によそながら別れの対面をする場面。原作では雪が降っているのを、清元では題名で春雨にしているが、春も早い季節と考えたら納得が行く。そして実際には孫右衛門を出さないで、二人だけの道行にしているところが特色。第一部の解説を参照されたい。

### 常磐津 恩 愛 贖 関 守(宗清)

通称「宗清」。文政十一年(一八二八)十一月、江戸市村座の顔見世狂言「賈之雪源氏最良」(みつぎのゆき・げんじびいき)の一番目三立目に初演。奈河本輔作詞、五世岸沢式佐作曲。近松門左衛門の「源氏烏帽子折」の二段目「宗清館の場」から脚色したもの。

源義朝の没後、妾の常磐御前は三人の遺児を連れて、所々方々を流浪していたが、雪の降りしきる夜中、山城の木幡の関にさしかかる。この関には平清盛の命令を受けた宗清がいる。清盛の掟には義朝の子供を見付け次第に首打とあつたが、別に重盛の言葉には松を手折って松を助く、とある。常磐御前一行を捕えた宗清は、重盛の言葉を生かし、子供を助けるためには操を犠牲にするようにと言ひ含め、常磐御前を連れて行くというもの。

波乱に満ちた生涯を送った常磐御前は、『平治物語』『義経記』をはじめ幸若舞曲、古浄瑠璃などで知られていた。その生涯の一場面であるが、ここではむしろ宗清の胸中を主題にしている。なお、初演のときには牛若丸の見た夢の場面になっていたが、のち安政三年(一八五六)再演のときには、居所替りで長唄「鞍馬山」が上演された。

### 長唄 其 面影 二人 椀 久(二人椀久)

通称「二人椀久」。安永三年(一七七四)五月、江戸市村座で初演された。実はその前の享保十九年(一七三四)十一月に、同じ市村座で市村竹之丞(八世羽左衛門)が「二人椀久」を踊っているのだが、その十三回忌として再演されたもの。初演のときには「行く水に」からであったが、再演のときに「たどり行く」のくだりが補作された。錦屋金蔵作曲。

椀久というのは、延宝(一六七三―八〇)のころ大阪にいた椀屋久兵衛(久右衛門とも)のことで、新町の遊女松山のもとに通い、豪遊の果て座敷牢へ入れられたが、発狂して家を出、のち京都で死んだとも、安治川で水死したとも伝える。井原西鶴の『椀久一世の物語』や紀海音の「椀久末松山」などで知られ、一中節、豊後節、長唄「一人椀久」などに脚色されている。それらの集大成曲といっているだろうか。

狂乱した椀久がさまよい出て、松山に逢いたいと願ううちに、いつか眠ってしまふ。その夢の中へ松山があらわれて、ありし日の思い出を再現し、二人は楽しく踊るといふもの。「干さぬ涙の」、「行く水に」、鼓歌「あとより恋の」、能の「井筒」のクセをそのまま取り入れた「筒井筒」、踊り地のタマなど、とにかく変化はあり、唄いどころ聞きどころが多く、長唄大曲の一つといえよう。

## 御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございます。ございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御観賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年は、都合により会場が変更になります。新宿の朝日生命ホールで、三月六日(金)に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいます、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合せてお願い申し上げます。